

# シラ書に学ぶ信仰と知恵

シラ書 27 : 30 - 28 : 7



司祭 ヨハネ 井田 泉

2023年9月17日

聖霊降臨後第16主日

聖光教会にて

今日の旧約聖書はシラ書でした。あまりなじみがないかもしれませんが、シラ書は旧約聖書続編に含まれているものですが、諸聖徒日に朗読されるほかは、A年では顕現後第6主日に用いられるくらいではないかと思います。

今日はこのシラ書の世界に触れてみることにしましょう。

このシラ書を書いたのは、シラの子イエススという人です。わたしたちの救い主と同じ名前です。この人は長年聖書（わたしたちの言う旧約聖書）を研究した後、自分も人の信仰生活に役立つような教訓と知恵の書を書きたいと願って、ヘブライ語でこれを書いたそうです。その後、そのイエススの孫が、エジプトで祖父の書いたこの書物を見つけて、これを多くの人々が読めるようにギリシア語に翻訳した。彼はしばしば徹夜してこの翻訳の仕事に打ち込んだのですが、うまく訳せていないところがあると自分で告白しています。シラ書の序言で彼はこう言っています。

「そこで読者に願います。素直な心でこの書物を精読してほしい。我々は、懸命に努力したのであるが、上手に翻訳されていない語句もあると思われるので、そのような個所についてはどうかお許し願いたい。というのは、元来ヘブライ語で書かれているものを他の言語に翻訳すると、それは同じ意味合いを持たなくなってしまうからである。」序 15-22

まずヘブライ語で書かれたものがギリシア語に訳され、それがずっと後に日本語に訳されわたしたちの手に届いた、ということになります。翻訳の労苦に感謝します。

シラ書から印象的な言葉をいくつか取り上げてみましょう。

1. 「主を信頼せよ。そうすれば必ず助けてくださる。お前の歩む道を一筋にして、主に望みを置け。」 2:6

わたしたちの主なる神さまはわたしたちを助けることのできる方です。この方を信頼せよ、と呼びかけています。わたしの進む道をまっすぐ一筋にして主に向かう。主に望みがあります。

2. 「子よ、慎み深く、自らに誇りを持ち、自分を、あるがままに、正しく評価せよ。」 10:28

「子よ」という呼びかけは、イエスさまの呼びかけを思い出させます（マルコ 2:5）。「慎み深く」ありつつ、しかし「自らに誇りを持」つ。いたずらに卑下したり萎縮したりするのではなく、「自分自身を軽んじ」（10:29）たりせず、「自分を、あるがままに、正しく評価せよ」。大切なことではないでしょうか。謙虚でありつつ自尊心を持って生きることは、信仰的な生き方なのです。

3. 「子よ、あまり多くの事に手を出すな。何もかもしようとすれば、ひどい目に遭う。やり遂げようとしても、果たすことはできず、逃げようとしても、逃げきれものではない。」

11:10

これにはわたしはハッとしました。きっと著者自身が多くの人に手を出して痛い目にあっただけでしょう。貴重な忠告です。とはいえ、どうにもならないこともありますね。

シラ書の語りは一方的なものではなく、わたしたちに考えさせ、また対話へと招きます。

4. 「契約をしっかりと守り、それに心を向け、自分の務めを果たしながら年老いていけ。」 11:20

契約とは、神と神の民の間の約束関係、決して壊すことのできない結びつきです。神が「わたしはあなたがたを必ず守り導く」と約束される。それに対してわたしたちは「神さま、あなたに信頼し、従います」と約束する。そういう確かな関係です。

今日の使徒書でパウロは、契約という祝福に入れられたわたしたちについてこう語っていました。

「わたしたちは、生きるとすれば主のために生き、死ぬとすれば主のために死ぬのです。従って、生きるにしても、死ぬにしても、わたしたちは主のものです。」 ローマ 14:8

神に愛され捉えられたその恵みの中で、自分の務めを果たしながら年齢を重ねていく。あれこれ迷うことがあったとしても、わたしたちの人生の道はこれなのです。

## 5. 「自分の最期に心を致し、敵意を捨てよ。」 28:6

「心を致す」とは胸に刻むことですね。

自分の命には限りがある。自分の人生の最期が、終わりの時が必ず来る。この厳粛な事実を胸に刻みます。

いつなのか。わたしはどのような死を迎えるのか。恐れがあり、不安があります。けれどもその終わりの時、言い換えればわたしたちがこの地上の生涯から「光と喜びのみ国」（葬送式の「告別の祈り」祈禱書 356 頁）に移されるその時、そこに神がおられる。その最期の時も、その時に至るまでも、その時以降も、わたしたちを愛しておられる永遠の神がおられて、わたしたちを保ち支えていてくださる。わたしたちの生と死の一切の責任を、神が引き受けていてくださるのです。

「自分の最期に心を致し、敵意を捨てよ。

いと高き方の契約を忘れず、

他人のおちどには寛容であれ。」 28:6-7

自分の命の限界を思うとき、わたしたちは謙遜にされます。そこから他人に対して寛容になるようにと招かれます。

シラ書の最後は 51 章です。ここで著者、シラの子イエスは祈りをささげます。

「わたしは四方から取り囲まれたが、助けてくれる人はいませんでした。

人々の助けを求めたが、得られなかったのです。」 51:7

イエスは、ただ机の上で研究し、考えをまとめたというのではなかったのです。迫害され、とても苦勞した人であることがわかります。

「苦しみの日々に、高慢な者どもが力を振るうとき、孤立無援なわたしを見捨てないでください。」 51:10

「あなたはわたしを滅びから救い、苦難の時に助け出してくださいました。

それゆえ、わたしはあなたに感謝をささげ、

あなたを賛美し、主の御名をほめたたえます。」 51:12

神さまがわたしたちの心と口にも、切なる祈りと、感謝と賛美を与えてくださいますように。アーメン